

Cross-cultural Talk 2020

日程: 2020年10月2日・3日

開催方法: ZOOM

今年度のクロスカルチュラルトークは、新型コロナウイルス感染拡大防止のため密を避けてオンラインでの開催となりました。どこからでも参加が可能になったことにより、現在海外で調査・研究を進めている学生や名古屋大学を離れ新たな場所に活躍の場を移された元特任教員の方々にもご参加いただきました。また会場へ移動することなく参加できる形式は、例年では参加する時間を取れない教員の参加にも繋がり、オフラインでの開催よりも多くの学生・教員が集まりました。結果として2日間の参加者は当初の予定より多く、学生と教員合わせて50名+元特任教員3名による異文化交流の場として大盛況な2日間になりました。事務の方々のサポートも相まって、新しい形式でのクロスカルチュラルトークは2日間の幕を閉じました。

今年のテーマ「The road to Ph.D.: Common and different experiences found in multidisciplinary context」は、学生からの発案です。博士号を取得するまでの困難や疑問、問題等を共有したいと考え、決定されました。1日目は隠岐教授（経済学研究科）による基調講演「Two Cultures and Genderization of Disciplines」とウェルビーイング教員3名（内海准教授：国際開発研究科、足立助教：医学研究科保健学科、トゥリシア研究員：農学国際教育研究センター）によるパネルディスカッションが開催されました。2日目には最終学年の学生によるオンラインでのポスタープレゼンテーションも実施され、延べ4名の学生に「ベストポスターデザイン賞」と「ベストプレゼンテーション賞」が授与されました。またテーマに則したグループディスカッションも行い、2日間を通して学生たちは現況の学術面、身体面、心理面での悩み、技術の更新やキャリアプラン等、分野が違っても同じような問題を抱えていることに気づくことが出来ました。また、問題をリスト化することにより、対応策を考え、その問題を乗り越えていくことに繋がることも実感しました。パネリストとしてご参加いただいた教員をはじめとして、ウェルビーイングプログラムに携わる教員や元特任教員からの見解や意見は、学生にとってとても貴重なものとなりました。

